MIT・ナースリー・スクール

原口純子

夫の留学に伴い渡米し、三歳の娘が約一年間通ったナースリー・スクールの経験は、幼児教育を考える上で、私自身にとっても大へん貴重なものであった。

MIT（マサチューセッツ工科大学）ナースリー・スクールのウェストゲイト分室は、大学の既婚学生用アパートのビルの一階にある。日本の幼稚園のように同じ年齢の幼児のクラスがいくつもあるというわけではなく、クラスの数は一つしかない。しかも、パート保育になっていて、週三日、月水金のコースと、週二日、火木のコースとに分かれている。時間は朝九時から十二時までの三時間、子どもの数はいずれも十二名が定員である。年齢は二歳半から五歳未満の子どもが対象となっている。週三回のコースは、年齢の上の方の子どもが多く、週二日のコースは年齢の下の方の子どもが多い。先生は一名、助手が一名、前期の九月から十二月までは、ボストン市内にある教育大学の実習生が助手に当っていた。それに子どもの親が一名、順番にお手伝いの当番がまわってくる。MITは留学生が多いせいもあって、娘の行っていた週二日のクラスでも、アメリカ人以外に、イラン人、イスラエル人、スエーデン人、ブラジル人、韓国人、日本人など、肌の色も、言葉も、風俗、習慣も違う子どもたちが集まっていた。たった一人の難聴の子どもさえなかなか受けいれてもらえない日本の幼稚園の現状と比べると、ここでは、どこの国のどんな言葉を使う子どもも全て受け入れているわけで、この保育のスケールの大きさは大へん興味深く感じられた。

入園には、健康診断書と保育料と保証金十五ドルを払込めばよい。保育料は週二日の場合、九月から翌年の六月までで二〇四ドル、約六〇、〇〇〇円であるが、よく計算してみると、一日九〇〇円、一時間当り三〇〇円の割合になってい

る、この二〇四ドルの中にはいわゆる保育料、教材費、ジュースタイムのおやつ代等の全てが含まれていて、学期の途中で、園からお金を請求されるということはなかった。服装は、よごれてもかまわない服を着せて来るようにと言われただけで、日本でままあるように制服、制帽、そろいのスモックなどはない。もちろん月決めの子どもの絵本を園が介在して子どもに売るなどということもない。日本では幼稚園の制服を決めて買わせ、園児に着せている園を近ごろ特に大へん多く見かけるが、幼稚園の子どもにどうして制服やそろいのスモックが必要なのだろうか。とかく我々日本人が常に他人の目を気にし、他人と同じでないと安心していられないのは、他の原因もあるにせよ、こんな幼児期から、似合っても似合わなくても、そろいのものをあてがいぶちのおしきせにさせられるせいもあるのではないかと考えたくなるのは、私の目がゆがんでいるせいだろうか。

ともあれ、簡素で、必要にして十分な幼児教育を見ていると、一見して派手な日本の幼稚園とその教育があまりにも、保育の本質を離れて、幼稚園の経営主義と、幼児教育にむらがる幼稚園産業のかもにされている面がありはしないかと思われた。

物質的に豊かだと思われているアメリカでも、MITのナースリー・スクールは大へん質素なものだった。部屋は二つあるが、居室の方は机とイス、画架、小動物のゲニベーク（モルモットのような動物）の飼育箱、絵本、ままごと、大工道具等のコーナー、それにたくさんの鉢植の植物でいっぱいだし、もう一つの部屋はピアノ、大型積木、ジャンプをして遊ぶ中古のベッドのマットレス、などが置いてあって決して広いとはいえない。ペーパータオルだけは使い捨てであるが、他のものはたいてい使えるだけ使っている。画架にかかっている紙は電子計算機の使用済の裏紙だし、えのぐのつぼは離乳食の空ビンを利用したものである。子どもたちに人気のある本物のタイプライターは、こわれたものを父兄が寄付したものだ。大人のドレスや、ハンドバック、それに空箱などの廃品がたくさん用いられている。しかしえのぐつぼの中には十分に濃いえのぐがたっぷりといてあるし、遊びの中で子どもが使うのりとか紙、小麦粉は、使いたいだけ制限されることなく使うことができる。

父母はお金さえ払えばあとは何でも園にまかせっぱなし、というわけにはいかない。十二回に一回はお手伝いの日がまわってきて、保育の準備から、後片付けまで一日、保育に参

加する。参加することは、参観とはだいぶ違って、自分の子どもばかり見ているわけにはいかない。保育全体をながめながら、自分の役割を的確につかんでいかなければならない。初めのころはえらく神経を使ってくたびれたが、父母の手伝いは単に人手としての意味だけでなく、保育を理解してもらうためにも両親教育として有効な方法だと思った。

ナースリー・スクールが、先生の側と、父母との協力によって運営されるという考え方は、かなり徹底していて、そのため会計の収支決算が学期ごとに提示され、先生の月給も、助手の手当も、一目でわかる。その他、大掃除や、こわれた本やおもちゃの修理、ナースリーの新聞、連絡の手紙のタイプなども父母が手伝っている。月一回の父母の会は夜七時半から開かれ、ワインやコーヒー、クッキーなどが出るが、これを用意するのも当番の父母の仕事である。この父母の会は、バザーの計画などをすることもあるが、ある時は児童心理学者の講演とディスカッションだったり、子どもの問題や、しつけの事などについて、先生と話し合う会だったりする。集まる人数が少ないせいもあるが、車座にすわって、どの母親もどんどん自分の考えや感じたことを述べ、活発に議論がとりかわされていた。ディスカッションを重視するアメリカの教育の一つの成果を見る思いがした。

さて、保育について述べよう。典型的なある一日は次のように展開していた。

九月〇日　晴

子どもが登園すると先生が〝おはよう〇〇チャン〟と迎えてくれる。トイレの前の廊下に子どもにちょうどよい高さの深さ十センチぐらいの大きな水槽があって、その中に薄い石けん水が入っている。二、三人の子どもが助手の先生からストローをもらってブクブクをしたり、シャボン玉を作ったりしている。助手の先生が、ストローで水面にモリモリに泡を立てて、子どもたちがキャーキャー大さわぎをしている。部屋の中では机の上にピンクや青の色のついた、肌ざわりのよいプレイドー（小麦粉粘土）が四つぐらいのかたまりになって置いてあり、子どもたちが、クッキーの型ぬきやローラー、フォーク、ままごとのお皿などを使いながら遊んでいる。別のテーブルには、カラー画用紙とのり、それに毛糸やボタン、マカロニや貝がらの入った箱があり、紙に毛糸やボタンをくっつけてデザイン遊びのようなことをしている。大型積木のある部屋から、子どもがボンボン、ピアノをたたい

ている音が聞こえる。絵本コーナーのマットの上で、今日のお手伝いの母親が両側に子どもを従えて、絵本を読んでやっている。先生は登園してくる子を迎えながら、粘土やのり遊びをしている子どもたちを見ている。しばらくして、ブラブラしている子をさそって、ゲニペークにキャベツの葉をちぎって与えていた。朝から続いた遊びが一段落して、十時半ごろになると全体的に遊びがだれてくる。ここで全員おかたづけになり、机の上をきれいにして、部屋も一応かたづける。手を洗ってジュースタイムになる。全員行儀よく机につき、紙コップを渡され、リンゴジュースをもらい、ザルに盛ってある甘味のない塩クラッカーを欲しいだけもらえる。時にはピーナッツバターやマシュマロが出て、クラッカーに塗って食べる。ジュースタイムの後は休息で床に毛布のような布をしいて、先生も、子どもたちも腰をおろしてすわり、先生が絵本を読んでくださる。物語のこともあるが、絵を見て、この人は何をしていますか、とか、これは何でしょう、などというような話し合いをしていることもあった。手伝いのお母さんはジュースやクラッカーの後片付けをし、助手の先生は、絵本に興味がなくて積木のある部屋に行った子どもを見に行った。十一時ごろから十二時まで外に出てグランドで砂場、すべり台、ぶらんこ、それに、庭に三つある小さな子どもの家などで遊んで過ごし、十二時までに母親が迎えに来る。

一口に印象を比喩で述べると、日本で比較的普通に見られる保育を、狭い鶏舎に能率よくつめこまれて、六大栄養素（六領域）のしっかり入った濃厚完全配合飼料を与えられているブロイラーの飼育にたとえるとすれば、MITの保育は、庭にはなし飼いにして、コツコツコツとミミズやハコベをついばむにまかせているニワトリの飼い方に似ている。

MITのナースリー・スクールに子どもをやったことのある何人かの日本人に感想を聞いてみると、一部の人をのぞいて概して評判はよくない。お金を払っているのに、子どもは遊んでばかりいるし、これといって何も教えてくれない。日本で通っていた幼稚園はもっと熱心に教えてくれた。その上親もコキ使われる、というのが大かたの理由である。たしかに日本の保育者は大へん熱心な人が多いし、保育内容の教育密度も高い。一日の保育の中に歌も絵も自然観察も体操も、テレビの視聴なども加わって、かつ、それらの全ての活動には全員がもれたり、はみ出すことなく参加することが期待されている。というより強制されているという方が当たってい

るかも知れない。たとえ遊びを主とした保育でも、その○○ごっこや○○遊びは先生によって構成され、全員が○○遊びをするように指導される場合が多い。たしかにこのような教育密度の高い保育には、それなりの良さがあり、かつ効果も上がっているのだと思う。保育とはそういうものだという目でMITの保育を見ると、子どもたちはなんだかやたらに遊んでばかりいて、お金を払って受けている〝教育〟とは受けとめがたいと不満をもらす気持ちも理解できないではない。それでは、このナースリー・スクールの保育は何なのだろうか。保育内容に立入って見ると、ここで主に見られる遊びは、粘土（土、小麦粉、ゴム）、水遊び、砂場、絵を描く（クレヨン、マジックインキ、絵のぐ）、のり遊び、レゴ、組版、フィンガーペインティング、積木、ジクソーパズル、おままごと、スーパーマンごっこ、人形遊び、などどの遊びも子どもが自発的にするもので、これらの遊びの指導の特色は、十分な環境の整備と、他人に迷惑をかけること以外はほとんど制限しないことのように見うけられる。たとえば、ままごとをしている子どもが、遊びの中でお料理をして、小麦粉粘土をちぎって水にとかしてドロドロにして、テーブルの上や床が水や粘土でドロドロになろうと、「こぼさないように」などと言われることなく、全面的に受け入れてもらえる。このように、子どもが心から満足のいく楽しい情緒的体験に焦点がおかれているように思われた。

歌や音楽リズムはどうなっているかというと、ピアノはあるが、それは子どもが遊ぶためで、先生がピアノを弾いて歌を教えているのは見たことがなかった。しかし子どもの歌のレコードはさりげなく室内に流れているし、レゴや粘土をしながら、先生は声を出して歌っていた。また日本でいうと、〝せっせっせ〟とか〝かごめ〟のような歌遊びがたくさんあって、娘もいくつかおぼえてきて家で歌っていた。私の会った先生は、「ピアノの技術は大学で要求されないし、必要もないと思う。もし楽器が必要ならば、ハーモニカでも笛でもギター、アコーディオンなど何でもいいと思う」と言っておられた。

娘がナースリーに通い始めてごく初めのころにまずおぼえてきた英語は、モア（もっと）であった。これはジュースタイムにも、ぶらんこを押してもらうにも欠くべからざる必要があったらしい。しかしその後、あれこれしゃべることができるようになる前に身につけてきたのが、「ありがとう」「どういたしまして」という言葉であった。一時期、家中の者が娘

に、何かするごとに「サンキューは」「ユーウェルカムは」と請求されたものだった。ＡＢＣが読めるようになることよりも、人間として大切なものを育ててくれているように思った。

私自身、幼児教育における〝遊び〟の認識を、遊びが子どもに大切なのは、遊びが子どもにとって楽しいから、というより、遊びこそ有効な総合学習手段としての面を強調していたように思う。日本の現状で、楽しいことはよいことだということが〝教育〟として説得力を持ちがたいように思う。たとえば電車ごっこは楽しいからする、というより、電車ごっこは子どもに適切な活動テーマであり、電車ごっこの活動内容を分析してみると、カクカクシカジカの教育的意味がある。したがって多少電車ごっこをしたくない子もこの活動に参加するようにさそい、かつ遊びは放っておかず、より価値のある段階へ遊びを発展させるために教師は適切な助言、指導をする方がよいという風に考えていたように思う。しかし、日本の〝自由保育〟よりもっともっと自由に遊んでいる保育を見て、日本のかなり外見上遊んでいる保育でも、実質的には主知的な要素が強いこと、そして、それが文部省の出している、六領域を柱とする教育要領によって方向づけられていることを強く感じた。そしてそれこそ日本の保育の特色とは言えまいか。

それではＭＩＴの徹底的に遊んでいるナースリーの保育の柱になっているのは何だろう。ＭＩＴのナースリー・スクール全体の園長をしている、フラン・オールソン女史がある時、「幼児期に是非おさえておかなければならない事柄はそうたくさんはない。本当に幼児期に大切なのは安定した情緒と社会性を育てることだ」と言っておられた。ここにおける遊びの意味は、遊びを通して知識や技術を身につけることより、遊びが子どもにとって楽しいことにウェイトがかかっていて、その真に楽しい情緒的経験こそ、望ましい人格の形成につながっている、とは言えないだろうか。

大人の人手が充分にあって、子どもの数が少ないからこのような保育が可能なのだ、ということではなく、ほんとうに一人一人の子どもが尊重された保育をするために、人数を十二人におさえ、大人の手が三人必要だからそうしているのだと思う。金もうけのためではなく、コミュニティーの成員が参加することによって運営されているこのナースリー・スクールは、今も、幼児を伸び伸びと保育している。肌の色も、国籍も、英語の理解の有無も問わずに。